

「日々の理科」(第1807号) 2019,-6,20

## 「大雨の日、校庭のカモ」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

ほぼ一日中激しい雨が降っていたある日、外で遊べなくて校庭を見ていた子どもが、大きな声で私を呼びに来た。

「先生、先生、校庭に鳥がいる。カモだよ、たぶん。」



私は常に「買い物カゴ」を持ち歩いていて、その中には必ずカメラが入っている。この時もそれが役に立った。さっそく教室のテラスに出てみると、確かにカモらしき鳥がいる。しかも2羽のようだ。大雨で子どもたちが校庭に出てこないことを知っているようで、安心したようにのんびりとしている。



この羽色は、「マガモ」か「マルガモ」か「カルガモ」のいずれかである。くちばしの先端だけが黄色いので、どうやら「カルガモ」のようだ。マガモとちがって、カルガモは「オス」「メス」の見分けが難しい。この2羽も、番(つがい)のようにも見えるし、兄弟か姉妹のようにも見える。



じっとしているほうの一羽を、カメラのズーム一杯で撮影してみた。やはりカルガモに間違いはない。全身の羽が、完全に雨粒を弾いているのがわかる。しかしオスカメスが判然としない。カルガモのオス・メスは背中や尻の羽色で判別するのだが、素人には難しい。



もともと湿地や田んぼを好む野鳥である。大雨で芝が水浸しになった校庭を、水たまりの中に足をつけて喜んで歩き回っている。まるで天然の湿地帯を歩いている水鳥のように見える。



時々、水にくちばしを付けて、何か食べる様子も見られた。カルガモは草食なので、シバやスズメノカタビラの種子を食べていたのかも知れない。